



「威風堂々の歌」の成り立ち

烈々たる気迫こもる「威風堂々の歌」は、1955年（昭和30年）3月に誕生した。以来、約半世紀。嬉しいときも、悲しいときも、この歌を口ずさみながら、勇気を奮い起こし、明日への一步を踏み出した人は数知れない。

「威風堂々の歌」は京都で生まれた。

誕生の物語は、大阪支部のもとに京都地区が誕生した直後にさかのぼる。

ある会合で、大阪支部の各地区のメンバーが、次々と、自分たちの決めた地区歌を歌っていた。

しかし、関西の一方の雄を誇る京都地区には、まだ地区歌がなかった。

地区歌が欲しい。しかし、誰も作詞や作曲の経験などない。

洋傘の製造卸業を営む組長の大橋幸栄さんが、班長の桐村茂夫さんに、地区歌のない悔しさを語った。すると班長は、「じゃ、自分で作ればいいじゃないか」と、その場で鉛筆と紙を大橋さんに渡した。

大橋さんにも、もちろん作詞作曲の経験などない。しかし言い出した手前、「ようし、わしが作ったろ」と、店の小さな机の前で立ったまま考えた。

「広宣布布の出陣をするんや。威風堂々と」。大橋さんは自らの決意を込めて、鉛筆を走らせた。歌詞は、5分間でできあがった。“威風堂々”というのは、最初から心に描いていたイメージだった。「どない歌うねん？」との班長の言葉に、作曲も引き受けることになった。しかし、譜面が書けるわけでもなく、テープレコーダーといった文明の“利器”もない。歌うたびに曲は変わった。

作曲から1ヶ月。ようやく曲が完成した。

「ええ歌や。歌うと元気がわいてくる」

地区の人たちは、その力強さに感動した。この歌は地区歌に採用され、人びとの口から口へと伝えられていった。56年（昭和31年）8月、京都地区は京都支部になった。支部員は、「支部歌」となった「威風堂々の歌」を誇らかに歌いながら、全国一の弘教を实らせたのである。

「これはいい歌だ。これからはみんなで歌おう！」

58年（昭和33年）ごろのことである。そのころ、京都に激励に訪れていた池田青年室長が、「『威風堂々の歌』をもっと多くの人に歌ってもらおう」と提案。そのうえで池田室長は、作詞者の了解を得て歌詞を少し手直した。

当初、3番の1行目は、「我ら住む平安の 洛土見ん」であった。この「平安」と「洛土」の文字を、室長は日本と楽土に変えたのだ。

「我ら住む日本の 楽土見ん」という歌詞によって「威風堂々の歌」は京都の歌から日本の歌へと変わり、旋風を起こしていったのである。

この歌は、厳しい環境のなかから生まれた歌だからこそ、人びとの心をとらえたにちがいない。

